

教員の職務の実際

～実務家教員から教員志望者へのメッセージ～

関谷美佳子, 千葉圭子, 小池孝範

Of the work called the teacher, actually

～ from a teacher to a teacher applicant ～

Mikako SEKIYA, Keiko CHIBA, Takanori KOIKE

Abstract

The child repeats thought and experience of one one and grows up. Support the growth of such a child and it is the role of the teacher to let you acquire power to live and works. A student reads this from the contents of the story of two vice-principals, and one of next raises will to their teacher choice in the university early years.

1 はじめに

近年、教育職員免許状の取得にあたって、より実践的な指導力を身に付けることが求められている。教員の資質向上については、昭和30年代から重要な課題とされてきたが、昭和「五十年代後半になって、児童生徒の非行・問題行動の多発や偏差値依存の進路指導が問題」となり、「教員の資質能力の向上を図るべきであるとの国民の要請」が高まってきた（文部省（1992）『学制百二十年史』ぎょうせい、367-368頁）。こうした要請をふまえ、昭和62年の教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策について」では、「教員に求められる資質能力」として「実践的な指導力」の必要性をあげ、養成段階から「真に教員にふさわしい人材を養成すること」が求められた。その後の教員養成審議会答申、中央教育審議会答申においても一貫して「実践力」を備えた教員の必要性が求められてきた。

こうした提案をふまえ、平成12年度入学生からは、教職に関する科目に「教職の意義及び教員の役割」や「教員の職務内容」等を内容に含む「教職の意義等に関する科目」、義務教育諸学校の教育職員免許状取得者に対する「介護等体験」、平成22年度入学生からは、「教員として必要な知識技能を修得したことを確認する」ための科目として「教職実践演習」等が新設されるなど、より実践的な内容が増加している。特に、教員養成系大学・学部においては、教職に対する適性を向上させることに努め、教員の職務を知り、その良さへの理解促進を図るため、学校現場から講師を招く機会も増えてきている。

平成24年の中央教育審議会答申「教職生活の全体を

通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「これからの教員に求められる資質能力」として、「社会からの尊敬・信頼を受ける教員、思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員」が必要であるとし、具体的な資質能力として、「(1) 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」、「(2) 専門職としての高度な知識・技能」、「(3) 総合的な人間力」をあげている。

本稿では、「教員に求められる資質能力」について、答申等で示された内容を一歩進めて、秋田大学附属小学校の教頭及び公立中学校の教頭であった実務家教員2名からの聞き取りを通して、学校現場で求められる教員の資質能力とはどのようなものかについて、より具体的に提示し、両者の見解の中から、望ましい教員としての資質能力の共通点を見出し、教員養成のあり方を検討する際の一助とするものである。

2 実務家教員からの小学校教員志望者へ

「小学校の思い出は」と問われると何と答えるだろう。わくわくどきどきの入学式や感動と涙の卒業式だろうか。運動会や校外学習も楽しい思い出かもしれない。しかし、中には、友達と遊んだことや勉強を頑張ったことなど日常のことを思い出す人もいるかもしれない。そして、併せて、その思い出には教員が側にいたという印象が思い浮かぶのではないだろうか。小学校は、義務教育の始まりであり、学習面と生活面の基礎を培い、人格形成にかかわる大切な時期である。教員と子どもは、長い

時間を共に過ごし、多くの体験を共有する。日々の中には、楽しいことや苦しいこと、うれしいことも悲しいこともたくさん詰まっている。子どもは、その一つ一つの思いや経験を積み重ねて、成長していく。そんな子どもの成長を支え、生きていくための力を身に付けさせるのが教員の役割であり仕事である。実際に小学校でどのような仕事をしているかを次に述べる。

(1) 子どもたちの様子と教員の支援

【希望で 登校】

小学校の一日は、元気な挨拶から始まる。校門前では、副校長が毎日子どもたちを優しい笑顔で迎える。子どもたちは、今日一日、学校でどんなことが起こるのかワクワクしながら登校してくる。希望に満ちた新しい一日の始まりである。

【一日のスタート 朝の時間】

朝の時間は、一日の大事な始まりの時間である。中でも子どもの健康観察は、注意深く行われなければならない。一人一人の名前を大切に読み上げる学級担任。大きな声で「はい。元気です。」と応える子どもたち。でも、本当にそうなのか。声の張りや目の輝き、顔色などをしっかりと見ていなければならない。朝から体調が悪かったり、登校時に友達とけんかをしてしまって気持ちが落ち込んでいたり、中には朝食を食べてこなかったりする場合もある。子どもたちの健康状態や心の状態に合わせて、今日一日元気に過ごせるための言葉掛けや対応を考えていかなければならないのである。また、学年・学級ごとに、健康観察に加え、清潔検査や朝の歌、音読など心を落ち着かせ学習や生活に臨む基礎づくりをするための手立ても工夫している。

【「聴く」ことを大事にした 学習時間】

1年生の授業。教員は姿勢を低くして子どもに語りかける。なぜ、教員はこのような体勢をとっているのだろうか。そう、身体の小さな1年生と目を合わせるためにこのような姿勢をとるのである。目と目を見て話すことの大切さを教えることや目と目を合わせることで子どもの安心感を引き出すことへも配慮しているのである。また、まわりの子どもたちには、話をしている子どもに身体全体を向け、友達の意見や話を聴くことを指導する。学習の基本はまず「聴く」ことにある。このことを学年の発達段階に応じてしっかりと教えることが大事なのである。また、教員が一番のお手本となる「聴き上手」でなければならないことも覚えておいて欲しい。

【「できた」「分かった」が実感できる 授業づくり】

一日の多くの時間は学習時間である。教員は分かりやすく学習内容を子どもたち伝え、その定着を図るための工夫に最も力を入れている。ねらいを達成させるための

教材づくりや思考を深めさせるための授業展開など子どもの実態に合わせて構築する。また、体験的な学習を取り入れたり、学習の形態を工夫したりするなど子どもたちの「できた」「分かった」を実感させるために教員はたくさんのアイデアをもち、そのための準備に多くの時間をかけて、授業に臨むのである。

【待っていました 休み時間】

皆さんもそうであったように子どもたちは休み時間をとっても楽しみにしてる。(授業が少しでも延びて休み時間に食い込みと子どもが落ち着かなくなってくることもある。そういった意味でも45分間の授業づくりを大事にする必要がある。)なぜだろう。多くの子どもは、休み時間が好きな理由を「自由だから」「好きなことができるから」と答える。もともと子どもは、身体を動かすことが大好きであるが、遊ぶことは、社会性をはぐくむことにおいても大事な経験である。休み時間は、子どもたち同士でできまりをつくり、自分たちで遊び方を工夫し、時には、みんなが楽しむために、課題を解決していかなければならないこともある。「好きなことができる」ことは裏返せば、そこには選択があり、自己責任も発生する。子どもの自主性をはぐくむ大事な時間なのである。

よく学びよく遊ぶ。学ぶように遊び、遊ぶように学ぶ。どちらも熱心に夢中になって取り組むことが生きる力につながっていくと考える。

【栄養満点、笑顔満点 給食時間】

皆さんは、小学校の頃、ほとんどの人が給食を食べていることと思う。私もその一人であるが、学校の職員として改めて給食を見直すと実によく計算されて作られていることが分かる。栄養教諭が子どもの成長に必要なカロリーや栄養素を考えて献立を作っており、子どもたちが食べやすい食材の切り方や彩りまでも配慮しているのである。給食調理員の方々の仕事にも支えられ、毎日のように子どもたちに栄養満点の給食が届けられ、「おいしい笑顔」を生み出しているのである。また、最近では、「食育」の観点からも給食の重要性が取り上げられており、栄養教諭が子どもたちにバランスよく食べることの大切さを伝える時間も授業の中に設けられている。

【心を磨く 掃除活動】

掃除活動も大事な時間である。自分たちが使った所、みんなで使用する所を時間を設けて綺麗にする時間である。本校は、全校で一斉に掃除の時間を決めて取り組んでいる。箒で掃いたり、ぞうきんを絞って拭き掃除をしたり、ゴミを捨てたり、整理整頓をしたりするなど一日の汚れを綺麗にするとともに明日に向けて気持ちよく使用できるように心がけている。小学校で掃除をすることは、私たち日本人にとっては、ごく当たり前のことであるが、諸外国では一般的ではないようである。小学校で

子どもたちが自分たちの学校や教室を掃除する姿が「道徳心」「公德心」をはぐくむ素晴らしい活動であるということが外国のテレビ番組に取り上げられていたのを見たことがある。実は、当たり前と思われている活動に子どもたちの心を育てる大切な要素があることを改めて考えさせられた。「磨いているのは学校と自分の心である」子どもたちにも掃除のもつ意義を伝えながら大事な時間としていかなければならない。

(各学年通信から)

学 年	特 徴
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなものに興味・関心が高まる。 ・体力が増して、運動能力が伸びる。 ・グループで遊ぶようになる。 ・理屈を言うようになる。 ・男女の意識が芽生えてくる。 ・器用になる。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・「ギャングエイジ」と呼ばれる時期。 ・友達意識が強くなる。 ・運動量が増え、体つきもたくましくなる。 ・言語力が伸びる。 ・大人の心の動きが分かるようになる。 ・自分を客観視できるようになる。 ・反抗的な面が出てくる。
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期を迎える。 ・精神的に大きく成長する。 ・心と身体のアンバランスから不安定になることもある。 ・自我意識が芽生えてくるため、素直に「はい」と言わなくなるかもしれない。しかし、心の底では、自分の気持ちを分かちたいと強く願っている。 ・自尊感情が低下する。 ・高学年としての意識の高揚が見られる。

低学年ではいろいろなものに興味・関心が高まるため、たくさんの方に目を輝かせ、意欲的に取り組む姿が見られるようになる。中学年は「ギャングエイジ」と呼ばれる時期でもあり、仲間との関係性を大事にしたり、活動的になっていく時期である。高学年は、高学年としての意識の高揚が見られるようになる。児童会活動に活発に取り組んだり、異学年交流活動では年下の子どもたちの面倒を積極的に見たりするなど、自分の存在感や自己有用感を高めるようになる。

ここで大事なことは、特徴を知っていることだけではなく、特徴を理解した上で、子どもに支援することである。「なぜ、反抗的な態度をとるのだろうか」そこには、成長期の心と身体のアンバランスさから感情のコントロールが効かなくなっていることも想像される。やみくもに怒鳴りつけるのではなく、その子の話をじっくりと聴いてあげたり、適切なアドバイスをすることも場合によっては必要となってくる。

また、忘れてはならないのが「個人差がある。」とい

【感謝で 下校】

たくさんの方の学校職員や友達に支えられて、一日を終えた子どもたちは、感謝の気持ちいっぱいでお下校するのである。家でエネルギーを蓄えて、また新しい明日へとつながっていく。

(2) 小学生の特徴

小学校生を指導するには、その特徴を知っていることが大切である。次の表は、PTAの学年懇談会で保護者に伝えられた内容をまとめたものである。

うことである。33人の子どもを担当したのなら33人、一人一人の子どもに目を向け、その子の心や身体の成長に寄り添っていくことが大事である。また、PTA懇談会等で保護者にも子どもの特徴を伝えるのは、保護者にも子どもの発達の段階を理解してもらおうとともにその成長に寄り添い、協力して子どもを育てていくことの意識を高めるためである。保護者とは、教育、協育、共育、響育のスタンスで連携することが大切である。

(3) 教員の仕事

学生の皆さんに教員の仕事について書いたもらったところ、一番多かったのが「勉強を教える」次には「生徒指導に関する仕事」となっていた。印象としては、子どもと一緒に授業をしているイメージで書いていると思うがその授業をするための授業づくり、教材づくりは子どもたちが帰ってからの放課後に行っている。場合によっては、帰宅後や休日も仕事をしていることもある。目に見えないところで子どもたちのために教員は頑張っているのである。

生徒指導を答えていた皆さんは、ルールを守ることの指導や子ども同士のトラブルの解消をイメージとして持っているようだが、最近の生徒指導のとらえとしては、未然防止を重要視している。例えば、安全面での配慮として、学校内外の施設設備の安全点検や登下校指導を計画的に行っている。また、「いじめ」を防止する意味でもよりよい人間関係を構築するために普段から言葉遣いを始め、相手を思いやる心をはぐくむなど手立てを講じている。安心・安全を重視し、子ども一人一人の居場所づくりに取り組む前向きな生徒指導を目指している。

その他、保護者との連絡や学校事務も重要な仕事となっている。保護者からの相談があったときは、丁寧に対応している。「思い立って相談をしているのではなく、思いあまって相談しているのだ。」つまり、教員に相談するまでにどんなにか深く悩んでここに至ったのかということに思いを馳せ、寄り添うことが大切なのである。学習相談、生活相談、人間関係の相談、家庭内のことなど悩みは多様である。相談されたときには、苦情と受け取るのではなく、信頼関係を築けるチャンスととらえ、親身になって誠実に対応することが大切である。学校事

- ・時間や期限を守る。(もちろん社会のルールも守る。)
- ・笑顔であいさつをする。(笑顔を大切に。自分から進んであいさつをする。)
- ・人の話をよく聞く。(共感的な態度で、相手の気持ちに寄り添うように)
- ・たくさんすることに興味をもつ。(アンテナを高くして)
- ・失敗を恐れない。失敗経験を活かす。
- ・何事にも誠実な態度で臨む。

1点目に挙げたようにルールを守ることは、信頼される教員となるための大事な要素である。また、これまで、話したように教員という仕事は、たくさんの人とかかわる仕事であったり、子どもの興味・関心を刺激する豊かな授業づくりをしたりするためにも上に記載した内容を心がけることは重要である。また、どの項目もちょっとした心がけによってできることでもある。ぜひ、充実した学生生活を送りながらも教職に就くための準備も進めて欲しい。

私は、子どもが好きで、子どもといると楽しくてワクワクしてくる。子どものためには努力を惜しまないと思っている。しかし、実際は、子どもからたくさんの感動をもらったり、心を和ませてもらったり、子どもたちから教えてもらうことの方がたくさんある。皆さんに教職の内容やそのすばらしさをお伝えするには、足りない面があったかと思うが、私自身、教職について20数年が過ぎたが、教員という職業や学校という空間は、毎日が魅力にあふれていると感じている。子どもたちは、日々成長していて、昨日できなかったことが、今日できるよ

務については、児童や生徒であった皆さんからは気が付きにくい仕事であるが、学年・学級会計や通知表、指導要録、提出物の確認、通信等様々な事務的な仕事がある。また、校外学習や修学旅行などの見学先やバスの予約などの渉外も行っている。細かく、挙げればきりが無いが、たくさんの人とかかわり、出会いの多い仕事である。併せて事務のIT化も日進月歩で進んでおり、使いこなすための勉強も必要である。

(4) 今からできること

教員に求められる力としては、次の3点が一つの目安となっている。

- ・一人一人の子どもへの愛情あふれる教員
- ・教職の専門性に対する探求心と情熱のある教員
- ・使命と誇りに満ちた教員

言葉にすると高尚なイメージになるかもしれないが、「子どもが好きである」という気持ちや前向きに研鑽修養する気持ちがあれば、十分な教員の資質があると言える。今からできることや学生の頃から意識して身に付けておけばよいと思うことを何点か挙げる。

うになる。「分かった」「できた」という瞬間の子どもたちの表情は、なんときらきらと輝いていることだろうか。あるいは、何ヶ月も練習してきた鉄棒の逆上がり。クルンとできた瞬間。その子にとって、生まれて初めての瞬間に立ち会えた喜び。努力が報われた時である。教員としてのやりがいを感じられる時である。「先生、ありがとう」「先生、大好き」と言ってもらえ、感動を共有できるのである。他の職業では、味わえないことだと感じている。

確かに大変なこともあるが、感動の多い職業でもある。また、自分の育てた子どもたちが、将来、宇宙飛行士になったり、道路を作ったり、プロ野球選手になったり、優しいお父さんやお母さんになったり、そういう意味では、夢を育てる、未来をつくる仕事であるとも言える。その意味からも私は、この仕事を誇りに思っている。

これまで事例を挙げて話したように小学校教員は、子どもと多くの時間を共有する。教員の考え方や感受性は少なからず子どもたちに影響を与えるのである。「教育は、人なり」、ぜひ、皆さん自身が魅力的な人間となって、子どもたちを導いて欲しいと願っている。

教育の制度が充実し、現在、義務教育として小学校、中学校の教育が当たり前を受けられる私たち日本人の幸せを実感する一言であり、教育に携わる仕事への大きな誇りと価値を感じる言葉である。また、制度に寄りかかった教育に止まらず、さらにその内容の充実を図っていかなければならないと考える。

3 実務家教員からの中学校教員志望者へ

中学校の教員の仕事は、基本的には、小学校の教員の仕事と共通する部分が多いが、一方で小学校とは異なる部分も少なくない。一番の大きな違いは、子どもたちの発達段階である。教員として教壇に立つ際に、「小学生の相手は大丈夫だけれど、中学生となるとちょっと手強そう。」などを感じる場合もあるかもしれない。以下では、「中学校教員というのはどんな仕事なんだろう。」という、基本的な疑問に対して、実務家教員として日頃考えておることを記してみたい。

(1)「中学校教員」の仕事について

中学生の一番の特徴は、「半分は子ども、半分は大人」であるということであろう。大人びた考え方に感心させられることもある一方で、極端に子どもっぽい言動に驚かされることもある。一人の生徒の中に、二つの面が同時に存在しているように感じられる。大人と子どもが共存しているこの時期においては、その生徒の本来もっている力をうまく伸ばしてやれば、驚くほどの成果を上げることができる。中学生は、尊敬できる大人や良き指導者と出会ったときには、非常に大きな信頼を寄せ、素晴らしい力を発揮する。したがって、この時期にどんな大人と出会うか、どのような指導者に指導してもらえるかということは、非常に重要な意味をもっている。

その反面、中学生は、非常にもろく、壊れやすい危うさをもっている。家庭環境の変化や、学級の雰囲気、友人関係等、周囲の影響を受けやすい時期でもある。この時期には不登校、いじめ等の問題が多くみられるようになる。いわゆる「お利口さん」と言われていた子が、ガラリと変わってしまったり、とんでもない大きな事件を起こしてしまうことも珍しくはない。保護者にとっては、子育てにおいて一番難しい時期とも言える。

このようなことから、中学校教員は、生徒指導上最も大変な時期の教員と認識されている。では、このような中学生期において、どのような教員が望まれ、求められているのだろうか。私は、これまでの経験から、次のような先生が、中学校教員として望ましいのではないかと考えている。

◇子ども一人一人の人権を大切に、子どもと真摯に向き合う教員

◇子どもの可能性を信じ、目標に向かって一緒に前進しようとする教員

◇子どもにしっかりとした学力を付けさせることができる教員

◇自分の生き方を語ることのできる教員

このようなことを踏まえた上で、中学校教員の魅力と難しさはどんなところにあるのかについて、これまでの実務の体験から考察してみる。

まず、魅力については、次の3点を挙げたい。

◎子どもの成長を日々実感することができる。

◎子どもの人生に大きな影響を与えることができる。

◎人間的な触れ合いや感動を体験することができる。

中学生は非常に純粹であるので、一緒に生活していると、心を打たれることがしばしばある。おそらく他の仕事では決して味わうことのできないであろう感動を体験し、そのたびに「教員になって本当によかった。」としみじみと感じている。このようなことから、多くの教員は、仕事にやりがいや生きがいを感じ、充実感をもちながら職務に励んでいる。

その一方で、中学校教員には次のような難しさがある。

▲さりげない一言が子どもを深く傷つけたり、信頼関係を損ねてしまったりすることがある。しかも、その修復は簡単ではない。

▲子どもや保護者に誠意をもって対応しても、思いが通じないことがある。

▲どんなに頑張っても、これで十分ということはなく、際限のない仕事である。

このような状況の中で、職務の難しさに無力感を覚えたり、多忙さからストレスを抱えたりする教員も決して少なくない。実際に、心の病に陥り、休職する教員が一定の割合で存在するし、その数は年々増加している。

それにもかかわらず、教員を志望する人は多く、秋田県の教員採用試験は相変わらず高倍率である。たとえば、昨年度の中学校社会科教員は、62.0倍という高い倍率になっている。なぜだろうか。それは、「教員」という仕事に大きな魅力を感じる人が多いからではないか。

さて、それでは、どのような人が中学校教員に向いているだろうか。よい教員の条件として、次の三つを挙げたい。一つ目は、「子どもが好き」ということ。二つ目は、「教えることが好き」ということ。そして三つ目は、「学ぶことが好き」ということ。この三つを満たしている人に、ぜひ中学校教員を目指してほしいと考える。これまでの経験から、この三つの条件を満たしている人は、生徒に信頼される良い教員になれると思うし、そうすることで、すばらしい人生を送ることができると確信するからである。

(2) 教員の仕事の実際

教員の仕事の例として、今後「教職入門」や「教育実習」で観察することになるが、朝だけをとってみても、登校指導、学級での生徒指導、提出物点検、朝自習の指導、学年集会での講話、そして学級の朝の会など、多くの仕事をこなしていくことになる。目の前のことに忙殺される現状であるが、教員の仕事を整理して考察してみよう。

学校には、「学校目標」というものがある。教育活動全体を通じて、学校目標の具現化が図られることになる。そのためには、「学校運営組織」（すなわち、校務分掌）

というものが必要になる。「校務分掌」を定めるのは、校長である。「校務分掌」とは、「学校としてなすべき仕事を適正かつ効果的に処理するため、各教職員が仕事を分担し、その仕事を一定の秩序の下に処理する仕組み」である。言い換えると、学校には様々な仕事があるが、それを一人でこなすのは無理なので、先生方全員が分担して行う、ということである。

教員の仕事の中で最も目立つのは、「授業」であると思うが、実際には、先生方は授業をするだけでなく、様々な校務分掌をこなしている。

「校務」は主に次の5点にまとめることができる。

- 教育課程に基づく学習指導など教育活動に関するもの
- 学校の施設設備や教材教具に関するもの
- 教職員の人事に関するもの
- 文書の作成処理や人事管理事務、会計事務など学校の内部事務に関するもの
- 教育委員会などの行政機関やPTA、社会教育団体などの連絡調整に関するもの

校務分掌の中で特に大切な役割を担うのが、「〇〇主任」「〇〇主事」と呼ばれる人たちである。例えば、「主任」では、「教務主任」「学年主任」「研究主任」「事務主任」など、「主事」では、「生徒指導主事」「進路指導主事」「保健主事」などがある。各学校では、学校運営組織が整えられ、分掌が細かく定められている。通常、一人の教員が複数の分掌を担当する。各分掌が効果的に機能することで、学校全体の教育効果が上がる。しかし、弱い部分があれば、そこから綻びが出て、思わぬ事態に展開することもある。

教員の仕事は、更に広範囲に及んでいる。例を挙げると、「教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の指導」「校務分掌に関わる業務」「生徒指導に関わる業務」「部活動指導」「保護者、地域社会、外部機関との連絡調整」などである。

このように、中学校教員の仕事は多岐にわたっており、量的にも質的にも大変な仕事である。しかし、その分、やりがいや喜びも大きい仕事である。教員の仕事の実際を十分に理解した上で、中学校教員を目指していただきたい。

(3) 素敵な教員になるために

自分のこれまでの教員生活や、教育委員会という今の立場で見えてきたことなどから、素敵な教員になるためのヒントをいくつか述べてみたい。

①まずは素敵な社会人に

「素敵な教員」であるためには、「素敵な社会人」でなければならない。これは、子どもはもちろん、保護者や地域の方々にも信頼される教員となるために、非常に大事なことである。例えば、服装や髪型、持ち物などにつ

いてもそうである。基本的に、教員には服装や髪型などについての決まりはない。しかし、教員の職務内容や、求められる資質を考えたとき、どのような身だしなみが望ましいのかは、自ずと判断できるであろう。保護者から見た場合、自分の子どもの担任が奇抜な髪型であったり、学校にそぐわないような派手な服を身に付けていたら、どう感じるだろうか。逆に、服装にはまるで無頓着で、清潔感やセンスがみじんも感じられないような先生は、どうだろうか。そのような先生は、子どもたちや保護者、地域の人たちに魅力的に映るであろうか。尊敬の対象となり得るであろうか。

プロの教員は、だれが見ても好感のもてる、清潔でシンプルで、機能的なファッションを心がけるべきである。華美な服装は必要ないし、基本的に、学校にはそのようなファッションは馴染まない。大学生にとってはごく当たり前の服装でも、教員としてはどうか、と思えるファッションは少なくないので、よく考えておく必要がある。服装は、教員のプロ意識が表れる重要な指標の一つである。教員は、服装で隙を見せてはいけない。

また、「時間や期日を守る」ことは、教員としてはもちろん、社会人としても常識である。時々、チャイムが鳴ってしばらくしてから授業にくる先生がいる。このような教員が、子どもに遅刻の指導をすることができるだろうか。

また、仕事上の提出物など、期限がきてもなかなか出さない教員がいる。このような教員が、子どもに、「宿題は月曜日までに必ず出すように」というような指導ができるだろうか。はっきり言って、説得力がない。子どもへの指導を徹底させるためには、自分がまずしっかり

できなければ話にならない。これができない先生は、子どもや保護者からも信頼されることは難しいであろう。

②成長角度の高さで勝負は決まり

若い教員を見ていると、「この人は伸びそうだな」と感じる人がいる。それは、前向きで、どんなことでも吸収しようという意欲に溢れている人である。そのような人は、たとえスタート地点では他の先生と比べて少々劣っていても、どんどん力を付け、そのうち追い越してしまう。大体2、3年経つと、その人の「成長角度」は決まってしまうと言われている。この角度が「高い」人と「低い」人で、10年、20年と経ったときに、どれほどの差がつくのか、考えて欲しい。成長角度は才能で決まるのではなく、心のもち方で決まってくると考える。

成長角度の高い人の共通点として、一生懸命であること、素直であること、そして謙虚であることが挙げられる。また、身近に「あんな教員になりたい」というモデルがいる場合、成長角度が高くなる可能性が高いことが知られている。

分からないことがあった場合には、一年目のうちに、先輩の先生方に遠慮しないでどんどん聞いた方がいい。一年目であれば、大概のことは教えてもらえるはずである。こんなことを聞いたら恥ずかしいのではないか、などと思わずに、若いうちにどんどん聞いた方がいい。今しか、聞けないのである。

ベテランの先生は、自分からはなかなか「教えてあげよう」と言いにくいものである。しかし、多くのベテランの先生方は、聞かれると、喜んで教えてくれるはずだ。教員としての力量は、成長角度によって決まる。そして、最初の2、3年が勝負だということを頭に入れておいてもらいたい。

③自己研鑽（学び続けること）の大切さ

よい教員の条件の一つとして、「学ぶことが好き」ということを挙げた。これは、実はとても大事な要素である。教員は、教えるのが専門だと一般的には思われているが、実は、学ぶ機会も非常に多く、その必要性も高い職業であるからだ。

例えば、「学習指導要領」は、社会状況の変化に応じて変わっていく。年配の教員は今、自分が学生時代にはやったこともなかったパソコンや、電子黒板などを使いこなして授業をすることが求められる。英語が大の苦手で小学校の教員になったのに、外国語活動の授業をしなければならなくなったり、理科が大の苦手で中学校の国語の教員になったのに、総合的な学習の時間で環境について指導しなければならなくなったり、というようなことはよくあることである。

このような機会に出会ったときに、先生のタイプは大きく三つに分かれるようだ。

タイプA…これらを災難ととらえ、自分に降りかからないようにうまく避けながら、あるいは言い訳をしながら逃げ通そうとする人

タイプB…これらを困ったもの、やっかいなものと考え、不平を言いながらも、しぶしぶ取り組む人（実際はこのタイプが多いようだ。）

タイプC…これを自分を伸ばすチャンスと前向きにとらえ、進んで努力をし、楽しみながら身に付けてしまう人

これを繰り返していくと、長い年月の間には、AのタイプとCのタイプに大きな差が生じてしまう。そして、Cのタイプの人には、周囲からみても、いつも楽しそうで、生き生きと仕事をしているように見える。とても魅力的で素敵な先生に映るのである。「向上心は、仕事をますます面白くする」という鉄則がある。自己研鑽を続けることで、教員の仕事は、ますます面白くなっていくのである。

④「公平」ということについて

「教員はすべての子どもに対して公平であるべきだ」というのは、今さら言うまでもないことである。しかし、実際に学校で勤務してみると、実は「全ての子どもに対して公平にする」ということは結構難しいことであることが分かる。

例えば、どうしても、自分からよく話しかけてくる子どもや、活発で元気な子どもとは会話が多くなりがちである。一方、無口な子どもや、内気で自分からは教員に近付いてこない子どもたちとは、どうしても話す時間が短くなりがちである。どんな子どもであっても、間違いなく、子どもは一人残らず、先生に声をかけてもらいたい、先生に愛されたい、と思っている。

このことを常に頭に入れておかないと、子どもたちから、「あの先生はA子ちゃんとばかり話をして、私にはちっとも話しかけてくれない」、ついには、「あの先生は、えこひいきをする先生だ」という評価を受けることになる。そして、それが原因で、学級経営がうまくいかなくなることもある。

「公平」ということについては、十分過ぎるほど気を配った方がよい。例えば、学級通信を出す場合には、子どもの名前を載せた回数をチェックしておき、すべての子どもが大体同じ回数だけ登場するようにする。あるいは、一日が終わったときに、今日はだれと話したかを思い出して、その日声をかけることができなかった子どもに、次の日は意図的に話しかける、などである。そうしないと、例えばコミュニケーションの量などにおいて、一年間では相当な差が生じてしまうからである。「公平」ということについては、そのくらい気を配らなければいけない、大事なことだと考えている。

⑤地域のお祭りに行ってみる

さて、祭り文化の盛んな秋田県では、どこの市町村にも、その地域独自のお祭りや伝統行事というものがある。そして、ほとんどの子どもたちがそれをとても楽しみにしている。そのようなお祭りや地域の行事に、ぜひ足を運んでみて欲しい。

地域のお祭りに行くと、子どもが生活している地域のおいを感じることができる。そして、子どもたちは、勉強から開放されているので非常にリラックスしている。学校では見られない子どもの素顔を見ることができるのである。

お祭りのときに先生と会って話をしたのがきっかけとなって、その先生が大好きになった、あるいは、先生を身近に感じるようになった、という例はたくさんある。先生の立場からしても、お祭りに行ったことがきっかけで、子どもたちの住む地域への理解が深まったり、子どもや保護者、地域の方々との心の距離が縮まった、というような話は非常に多く聞かれる。地域の行事に、特に、子どもたちの大好きなお祭りには、足を運んでみて欲しい。得るものがたくさんあるはずである。

⑥保護者は敵ではない

「モンスターペアレント」という言葉をよく耳にするようになって久しい。実際、ちょっとしたことで学校に苦情を訴えたり、理不尽な要求をしてくる保護者は、ここ秋田でも、年々増えているように感じる。マスコミは、このことをおもしろおかしく取り上げたりしているし、それを題材にしたテレビドラマまで出てきた。

このような報道を目にすると、なんだか先生になるのが恐くなってしまったり、特に、若い方は、保護者の前に立つのが恐ろしく感じられたりするかもしれない。

しかし、実は、保護者はちっとも恐くはない。敵ではないし、ましてやモンスターなどではない。むしろ、最高の味方、支援者になってくれる人たちである。なぜなら、保護者と教員は、「自分の子どもをよくしたい」という共通の目的をもっているからである。

保護者は、一人残らず、自分の子どもをよくしたい、という願いをもっている。教員がこのことを理解し、どんな子どもであっても、その子の幸せのために誠意をもって取り組むとき、保護者は「同志」ではあっても、決して敵にはなり得ないのである。子どもをよくしたい、という気持ちを率直に伝えながら、誠意をもって保護者と接して欲しい。親は、決してモンスターではない。

⑦池上彰氏から学ぶこと

池上彰氏はニュースを分かりやすく伝える人として、数年前からテレビで引っ張りだこである。

この方は、以前「週間こどもニュース」という番組でお父さん役をやっていて、注目を集めるようになった経

緯がある。この番組は、名前のとおりもともとは子ども向けであったが、実は「今さら恥ずかしくて質問できない」大人も隠れたターゲットだったらしい。

池上彰さんのニュース解説は、なぜ分かりやすいのだろうか。それは、事前に、子どもたちや、今さら聞けない大人たちが、「何が分からない」のかを徹底的に追究するからだそう。その「分からない」ところ、「つまずいているところ」をしっかりと押さえた上で、そこが分かるように説明してくれるため、彼の解説は非常に分かりやすいのである。

この手法は、教員にとって、とても参考になる。「この程度は当然分かっているはず」と思いこみ、分かっていることを前提にして授業を進めると、当然、分からない授業になる。「何が分かっているのか」、「何につまずいているのか」をしっかりと把握して、それを踏まえて学習を進めていく、ということが、分かる授業づくりの大前提である。「素敵な教員」の大前提は、「分かりやすい授業をする教員」である。池上さんの姿勢を参考にしながら、何よりも「分かりやすい授業」をすることに最大のエネルギーを払って行きたいものである。

ここまで、素敵な教員になるためのヒントをいくつか述べてきた。しかし、教育というのは、結局、最後は「人間性」なのではないかと考えている。少しぐらい行き届かない所があっても、多少の失敗があっても、子どもたちと心がつながっていれば、子どもたちは必ずついてくる。失敗してしまったら、そこから学び、次に生かしていけばいいのだから、必要以上に恐れる必要はない。そして、教員として、決して忘れてはならないことがある。それは、「子ども一人一人はかけがえのない、大切な存在である」ということである。

親になって初めて本当に理解することであろうが、それぞれの子どもは、教員から見ると大勢の中の一人かもしれないが、親からするとそれぞれ世界でたった一人の大切な宝物なのである。

皆さんには、ぜひ、子ども一人一人を大事にする教員、一人一人のことを親身になって考える教員になっていただきたいと、心から願っている。

教育活動を進める中で、きっと、様々な場面に出会うことであろう。「どうしたらいいのだろう」と、判断を迷うこともあると思う。そんなときは、「子どもにとって何が一番いいか」ということを判断基準にして欲しい。それも、目先のことだけを考えるのではなく、「子どもの将来にとって」、「子どもの人生にとって」何が一番いいか、ということである。そうすれば、教員として、大きく間違えることはないはずである。

4 おわりに

以上、小学校教員志望者に求められる資質能力、中学校教員希望者に求められる資質能力について、実際の学校生活にそくして述べた。両者に共通する見解として、「前向きに取り組むこと」、また、「自己研鑽」の重要性があげられる（「前向きに研鑽修養する気持ち」〈2 (4)〉、「前向きで、どんなことでも吸収しようという意欲に溢れている人」〈3 (3) ②〉、「自己研鑽（学び続けること）の大切さ」〈3 (3) ③〉）。

「自己研鑽」については、平成 18（2006）年に改正された教育基本法で新たに追加された内容にも通ずる。旧教育基本法、第 6 条（学校教育）の第 2 項において、「法律に定める教員は、全体の奉仕者であって、自己の使命を自覚し、その職務の遂行に努めなければならない」とされていた学校の教員の役割が、改正に伴って第 9 条（教員）として独立し、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」とされた。これまで、教育公務員特例法第 21 条第 1 項において、「教育公務員は…中略…研究と修養に努めなければならない」ことが規定されていたが、教育基本法に規定されることによって、より重要視されるようになったといえるだろう（その具体的方策として、教員免許の更新制が導入された）。

しかし、この「自己研鑽」は、決して制度的に定められているからだけでなく、本稿で述べられているように、児童・生徒と向き合う中で、自発的、主体的に自ら必要とするものであろう。そして、その原動力となっているのは、「子どもに対する強い愛情」であり、子どもの成長・発達に携わることができる「教職に対する愛着や誇り」であろう。本稿 2、3 においても、直接、間接に、この 2 点に対する実務家教員の「思い」が伝わってくる。

教員を取り巻く環境は、現在、厳しいといえる。まず、教員になる最初の関門となる学校教員採用選考の採用倍率は、平成 27 年度の全国平均は、小学校で 3.7 倍、中学校で 6.2 倍となっており、以前より低下し、また、地

域による差があるとはいえ、決して容易ではない。また、平成 26 年に公表された OECD 国際教員指導環境調査（TALIS2013）によれば、日本の教員の仕事時間は、調査に参加した 34 の国と地域の中で最長の 53.9 時間、参加国平均 38.3 時間の約 1.4 倍となっている。さらに、文部科学省の「公立学校教職員の人事行政状況調査」によれば、教員の精神疾患による休職者数は、平成 4 年度から平成 21 年度にかけて 17 年連続して増加し（平成 4 年度は 1,111 人、在職者に占める割合：0.11%、平成 21 年度は 5,458 人、同 0.60%）、その後、漸減傾向にはあるものの、ここ数年は 5,000 人前後で推移している（平成 24 年度は 4,960 人）。

実務家教員の立場から「前向きに取り組むこと」の大切さが示されているが、教員をとりまくこうした現状は、教員を目指す学生にとって、教員となることへの不安をもたらす要因となり、「前向き」な気持ちを削ぐことにもなりかねない。しかし、本稿で述べられている、子ども達との生き生きとした関わり、そして、教員としてのやりがいや魅力は、こうした教員となることへの不安を解消する一助となるだろう。

また、大学での教職課程の履修を通して、児童・生徒として教育を受ける側であった「学生」は、教える側である「教員」として「最小限必要な資質能力」——「採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」（平成 9 年教員養成審議会第 1 次答申）——を身に付けることが求められている。教員養成にあたって、実践的な科目を増やすことによって、こうした資質能力の定着が図られているが、これまでの教育を「受けた」経験をもとに自らの教師のあり方を模索するだけでは、児童・生徒の立場から「見えていた」部分に限定されたものになりがちである。実務家教員が実務の中で得た様々な経験を、これからの教育を担っていく存在である学生に伝えていくこと、このことの意味は、一層重要性を増しているといえるだろう。